

ニーチェとニヒリズム

井ノ川 清

外国語教室

(1976年9月2日受理)

Nietzsche und Nihilismus

Kiyoshi INOKAWA

Department of Foreign Languages

(Received September 2, 1976)

Friedrich Nietzsche bemerkte frühzeitig die nihilistischen Erscheinungen nach dem Tod des Gottes, der im 19. Jahrhundert entstanden war, und schlug der Menschheit Alarm. In diesem Essay werden die nihilistischen Anschauungen von Friedrich Nietzsche behandelt. Dadurch werden uns geklärt werden, was der Nihilismus ist, wie er entstanden ist und wie er überwunden werden kann.

はじめに

現代はニヒリズムの時代ではないだろうか？この間に答えるにはまずニヒリズムとは何かが定義されなくてはならない。ニーチェはいう。

「ニヒリズムとは何を意味するのか？——至高の諸価値がその価値を剝奪されるということ。目標が欠けている。『何のために？』への答えが欠けている。」（『権力への意志』S. 10）

第二次世界大戦の終了と共に世界は二つの陣営に分れた。即ち人類はアメリカ式資本主義とソヴィエト式社会主義との二つを目標としてそれぞれの陣営に分れた。アメリカを盟主とする陣営では自由と民主主義を至高の目標としてアメリカ式豊かさの追求を目標とした。ソヴィエト社会主義の陣営では、この地球上で初めて革命に成功したソヴィエトが当然の権利として自己主張し、他国はそれを模範として一枚岩の団結を誇った。人類の向うべき方向はアメリカ型かソヴィエト型かの二つのうちのいずれかであるように思われた。だが時間の進むにつれて米ソ二大強国に基くこの体制は次第にゆるぎだした。ア

メリカ式豊かさは貪しい国々にとっては夢のような目標であつたが次第にその恥部を露呈してベトナム戦争とウオーターゲート事件とによつてその落着をみたのである。他方社会主義陣営に於てもユーゴスラヴィアを初めとして中国のソヴィエトからの離反をきっかけとしてモスクワを頂点とする社会主義体制は崩壊してしまった。各国の共産党はそれぞれ自国の歴史的発展段階に基く革命方式を自己主張するに至つた。さらにまた一体社会主義とは何かということが問題視されるに至つた。生産力中心主義をとり、物質主義的に資本主義社会に追いつき追いこすことが社会主義というものなのだろうか？意見の合わないものを強制収容所に入れこみ、ソヴィエト体制を守るためには小国の主権を踏みにつて武力干渉を公然と行うことを正義だとするのが社会主義であつたのであろうか？資本主義対社会主義といつてみても両者とも物質主義的な豊かさを目指とし、物によって幸福を実現しようとしたということでは全く同じ路線を歩んでいるといえる。今日ではこの物質主義的工業化社会が問題にされ出しているのである。産業革命以来の人類の歩みが現在問われはじめている。地球上の資源は有限であ

るのに欲望は無限に拡大する。従つて物質主義的な幸福の追求はおのずからその限界にぶつかるとであろう。今日ようやく先進文明諸国がみずからの立脚基盤に疑問を感じ、反省をしつつあるとき、発展途上国は強い情熱をもつて先進文明諸国に追いつき追いこせとばかりに、この疑問符を投げかけられた路線を歩もうとしている。まるで全人類が狂い出してしまつたかのようである。

今日では各民族各国家はそれぞれ目標を持つてはいるが人類全体としては目標が欠けている。人類は全体としてどこに向うべきなのであるか？人類全体としてみた時たしかに現代はニヒリズムの時代である。人類全体に妥当する至高の価値というものがない。東西問題と南北問題の二つの問題を克服するだけの目標を含んだ人類全体にとっての目標がない。国連は極めて僅少なことにしか役立っていない。交通機関と通信技術の発達にとって今日人類はようやく「人類全体」という概念を現実的なものとして問題にすることが出来る状態にまで達している。しかるに人類全体にとっての目標がない。人々は日々盲目的に生きかつ働いている。しかし「何のために」と問われるともはや答えられもものはほんの少数でしかない。

もつとも問題にされなければならないことは、今日のニヒリズムがニヒリズムとして明確に意識されていないということである。それはなぜかという人々は神を去り信仰心を捨て去ったが、その代替物としての科学技術を手中にしているからなのである。そしてこの科学技術はそれ自身としては限りなく発展しているのである。月にまで人間が到達できた、火星の表面を写真にとることができた、ということは科学の問題としてはたしかに大きな進歩なのであるが、これがただちに人間の進歩とは結びつかないのである。科学技術のとどまることない前進をみて人間は科学技術の発展こそが人間にとっての幸福を約束するものと錯覚した。従つて素朴な人たちは、この科学技術の方法論をそのまま人間事象や社会事象にあてはめることが出来ると信じた。そのもっとも典型的な例がベトナム戦争である。アメリカは最新の科学技術をもってベトナムに対した。もっともすぐれたコンピューターを使つてベトナム人を処理しようとした。しかし最新の科学技術を使つて行われたベトナム戦争にアメリカは勝てなかった。問題なのは科学技術を使用する人間の側なのである。科学技術が進歩すればするほどこれを使用する人間はそれだけ強大になっていなければならない。しかし今日では人間はますます卑小になりつつある。もっとも単純なことだが、原子エネルギーが開発されたとき、これを原子爆弾に使うかそれとも原子力発電所に使うかは全く人間の意志決定に存するのである。従つて現代では科学技術に対する人間の主体性いかに問われ

ているのである。しかし実際には科学者たちは巨大な科学技術の一歯車となり、単に科学技術全体の一要素となつてその一部門を受け持ちこれを進歩させるにせい一杯で、全体としての科学技術がどこに向っているのかということは殆ど意識されていないのである。このことを人類が意識するのは全人類的破局を迎える日まで不可能なことなのであるか？だが人類がいなくなればそれはそれですべては終りである。

我々は現時点に於て科学技術の進歩が即人間の進歩であるなどと考えないようにしなければならない。ニーチェはいう。

「進歩。——だまされてはいけない！時間は前方へと経過する、——だから私たちは、時間のうちにあるすべてのものが前方へと経過すると、信じたがる、——発展とは前方への発展であると……これは最も思慮深い者もまどわされる見かけだおしである。しかし一九世紀は一六世紀にくらべて進歩ではなく、また、一八八八年のドイツ精神は一七八八年のドイツ精神にくらべて退歩である。……『人類』は前進せず、それは現存してすらない。」（『権力への意志』S. 65）

我々は歴史は直線的かつ段階的に進歩し、一つの目標に向っているという歴史観に疑問を投げかけなければならないだろう。この歴史観は人間の歴史事象に自然科学の方法論（特に一九世紀の）をあてはめたものである。まさしく一九世紀に支配的になった科学的実証主義の方法論と価値観が問題にされなくてはならない。今日の世界からもし科学技術を全面的に無くしてしまえば、文明人は何という荒廃の前に立たされているかということがはつきりするだろう。科学技術をのぞいたら現代の文明人は価値あるものは何ももっていないのである。そしてこの時、それまで軽蔑して眺めていた野蛮人や発展途上国にいる人々の方がより大きな価値を手中にしているのが分るであろう。文明人はもはや科学技術しか誇るに足るものを持っていないのである。しかもこの科学技術のおかげで人類は破局か存続かの断崖の上に立たされているのである。

一九世紀に発生した「神の死」によるニヒリズム現象にいち早く気づいてこれを取り上げ人類に警鐘を鳴らしたフリードリッヒ・ニーチェのニヒリズム観が本論で取り扱われるであろう。このことによって我々にはニヒリズムとは何か？またそれはどのようにして発生したのか？そしてそれはどのようにして克服されるのか？ということが明らかにされるであろう。

1. 歴史現象としてのニヒリズム

「二千年の長きにわたってキリスト教徒であったことに対して、私たちが償いをしなければならない時代がや

ってくる。私たちは私たちを生きながらえさせた重心を失っているのである、——私たちは、しばしの間、どこへ行きどこへ帰るかを知らないであろう。」(「権力への意志」S. 24)

ニヒリズムはそれまでヨーロッパ人にとって最高の価値となっていたキリスト教及びキリスト教道徳の崩壊とともに発生した。たしかに思想的にはこの現象は一九世紀前半に起こったヘーゲル哲学の解体、及びそれにともなって起こった従来の形而上学の破産によって生じたものである。即ち現実世界を偽の世界であるとし、彼岸に真の世界であるイデア界を設定したプラトン哲学、また此岸の世界の悲惨さに目をつぶり、彼岸に天国を設定するキリスト教、さらに歴史は一つの絶対理念へ収斂されるのだというヘーゲル哲学の観念性、これらが一九世紀ヨーロッパに於て急速に転倒された。フォイエルバッハ、キルケゴール、マルクスなどは一斉にこの歴史的運動を推進せしめた。

しかしニーチェはニヒリズム発生の原因をやゝ違った角度から論ずる。即ちニーチェはニヒリズム発生の原因を内在的にキリスト教そのものの内部にあった一つの道徳に帰因させる。

「困窮はそれ自体では、ニヒリズム(言いかえれば、価値、意味、願望の徹底的拒否)をうみだすことは断じてできない。これらもろもろの困窮はいぜんとしてまったくちがった諸解釈を許すものである。そうではなくて、一つのまったく特定の解釈のうちに、キリスト教的・道徳的解釈のうちに、ニヒリズムはひそんでいるのである。」(「権力への意志」S. 7)

ニーチェはキリスト教の崩壊現象の原因をキリスト教の外部の圧力に求めないで、キリスト教そのものの内部にキリスト教を崩壊せしめるものがあったのだという。

「キリスト教の没落——その道徳(これはキリスト教から解きはなすことはできない——)での没落。キリスト教の道徳がキリスト教の神に反抗するのである(誠実感が、キリスト教によって高度に発達して、すべてのキリスト教的世界解釈と歴史解釈の虚偽や欺瞞に対して嘔吐をもよおすにいたる。……)」(「権力への意志」S. 7)

「道徳を育てあげた諸力のうちには誠実性があった。このものがついには道徳に反抗し、その目的論をその私心ある考察をあばきだした。」(「権力の意志」S. 11)

即ちキリスト教道徳の中の一つである「誠実性」という徳をもって人々はキリスト教とキリスト教道徳を考察した。そうするとこれらのものの虚偽と欺瞞とがあばき出されるに至ったのである。誠実性をもってキリスト教的道徳を考察するとまず道徳への懐疑が生まれてくる。そしてキリスト教の道徳的世界解釈は彼岸性のうちへの逃避をこころみたまものである以上、この彼岸性が否定さ

れれば必然的にニヒリズムへとゆきつく。

「巨大な力がささげられた唯一の世界解釈が遂行しえなくなると——すべての世界解釈は偽ではなかろうかという不信がめざめる。」(「権力への意志」S. 8)

この不信がめざめれば当然の成り行きとしてニヒリズムが結果する。

「それに加えて、彼岸とか、『神的』であり道徳の体现であるような事物それ自体とかを指定する権利を、私たちはいさゝかももってはいないという洞察」(「権力への意志」S. 10) が生まれてくる。そして「この洞察は『誠実性』が育てあげられてきたことの結果である。だから道徳を信ずることの結果ですらある。」(「権力への意志」S. 10)

さて、現実の世界を仮象としてこれに対するに「真」の世界を設定し、これこそが実在であるとする彼岸性と、神の意志が生成の過程を通じて達成されるとする目的論的歴史解釈が否定されると人々は眼前の此岸の世界を前にしてこの此岸の世界はもはや何の意味も何の価値ももたないくだらない世界であると思うようになる。この考えによって徹底的ニヒリズムが生じるのである。

ところで「ニヒリズム」というと人はこれを何か否定的なもの、好ましくないものと考えがちであろう。しかしニーチェはニヒリズムの有用性といったものを強く意識している。

「いったいなぜニヒリズムの到来はいまこそ必然的であるのか?それは、私たちのこれまでの諸価値自身がニヒリズムのうちでその最後の帰結に達するからであり、ニヒリズムこそ私たちの大いなる諸価値や諸理想の徹底的に考えぬかれた論理であるからである、——これらの『諸価値』の価値が本来何であったかを看破するためには、私たちはニヒリズムを体験しなければならないからである。……私たちはいつの日か新しい諸価値を必要とする。」(「権力への意志」S. 4)

即ち、これまでの理想、願望、好ましいもの、尊重されるべきもの、といった価値あるものの実体が何であるかを見抜くためには、まずニヒリズムという立脚点に身をおいて、この観点からこれまでの諸価値を考察し直さなければならない。そのためにこそ人はまずニヒリズムを体験しなければならない。このたいどこそはすべての価値の価値転換の試みを計るニーチェにとってまさにふさわしいものであろう。

ニーチェはキリスト教道徳を否定するのは、この道徳の中の一つであった「誠実性」によるものとしたが、より一般的にニヒリズムを或る種の心理学的状態に基くものとして考える。

「心理学的状態としてのニヒリズムがあらわれざるをえないのは、第一に、私たちがすべての生起のうちに、

そのなかにはない『意味』を探しもとめたときである。そのためついには探求者は氣力を失う。」（「権力への意志」S. 13）

さらにまた或る何ものかが生成の過程自身をつらぬいて達成されるべきであるとする考えが、生成でもっては何ものめざされてはおらず、何ものも達成されないということが明らかとなると、生成の目的に関する幻滅となつてこれがニヒリズムに至る。

そしてすべての生起の内部と下に、或る全体者をすえ置いて、人間はおのれより無限に卓越している全体者に相関し依存しているという深い感情にひたるが、この全体者が人間をつうじてはたらないときには、おのれの価値を信じなくなってしまう。換言すれば人間はおのれの価値を信ずるためにこの全体者を構想したのだということになる。

さて生成でもっては何ものめざされてはいないし、また生成のしたに統一もないということになると、逃げ道としてのこっているのは、この生成の全世界を迷妄と判決して、彼岸に眞の世界を捏造することではない。そしてこのことが否定されると、つまり「目的」「統一」「真理」という概念をもってしても、生存の総体的性格は解釈されないとわかったとき無価値性の感情が生じてくる。

「要するに私たちが世界に価値を置き入れてきた『目的』『統一』『存在』という諸範疇は、ふたたび私たちによって引き抜き去られ——いまや世界は無価値のものにみえてくる。」（「権力への意志」S. 15）

ここからは心然的にニヒリズムへと至るであろう。

2. 生の生理学的状態としてのニヒリズム

歴史的現象としてのニヒリズムは、キリスト教の衰退及びそのもつ道德的諸価値の崩壊によるものであるが、ニーチェはさらにニヒリズムを生を生理学的状態に基くものとして考察する。この視点は「生」の哲学者ニーチェにとってまさに特徴的な、ニーチェの面目を示すものである。

「ニヒリズムは一つの病理学的中間状態を表明する。」（「権力への意志」S. 16）

ニーチェはキリスト教的道德の諸価値をそれ自体実在として存立するものであるとは見なさないで、価値設定者の側における力の一徴候、生の目的のための一単純化にすぎないものと見なすのである。

「価値とその変化は、価値定立者の権力の増大に比例する。」（「権力への意志」S. 16）

即ちニーチェは価値は価値を指定するものの生の状態つまり力への意志に他ならない生の状態に基くものであるとする。ここからニヒリズムには二種のものが考えら

れる。

「ニヒリズム。それは二義的である、

A. 精神の上昇した権力の徴候としてのニヒリズム、すなわち能動的ニヒリズム。

B. 精神の権力の衰退としてのニヒリズム、すなわち、受動的ニヒリズム。」（「権力への意志」S. 20）

能動的ニヒリズムとは、生の強さの徴候であり、精神の力がこれまでの目標、諸価値がおのれに適合しなくなったほどに増大していることがありうる時に現われるニヒリズムである。即ち生が極めて上昇したために従来の目標や諸価値が余りに小さなものにみえてきてもはやこれらが生に適合しなくなった時にあらわれるニヒリズムである。

「この反対は、もはや攻撃することのない疲労のニヒリズムであろう。その最も有名な形式は仏教である。すなわち受動的ニヒリズムとして、弱さの徴候として、精神の力は、疲れはて、憔悴しきり、そのためこれまでの目標や価値が適合しなくなり、いかなる信仰もみだしえないことがある——かくして価値や目標の綜合（これにあらゆる強い文化はもとずいている）が解け、そのため個々の価値がたがいに戦いあうにいたる、すなわち崩壊——かくして、活気づけ、癒し、鎮め、麻痺せしめるすべてのものが、宗教的とか、道德的とか、政治的とか、美的とかなど、さまざまに変装して前景にあらわれてくる。」（「権力への意志」S. 21）

そして結局受動的ニヒリストはいう。

「私たちは疲れている、というのは、私たちは主要な衝動を失ってしまったからである。『これまでのところは徒勞！』」（「権力への意志」S. 12）

これに対して能動的ニヒリズムは何をなすか。

「ニヒリズムは『徒勞！』を觀想しとるだけのことではない、……それは、手をくだすこと、徹底的に滅ぼすことである。……これは強い精神や意志の状態であり、かかるものには、『判断』による否定に立ちどまっていることは不可能である、——実行による否定がその本性からは生ずる。判断による無化に腕力による無化が助太刀する。」（「権力への意志」S. 21f.）

普通ニヒリズムという否定的なものとしてとらえられがちであるがニーチェはニヒリズムの積極面を強調する。これはあらゆる価値の価値転倒を目ざすニーチェにとっては必然的なことなのである。つまり従来支配権をふるっていたキリスト教及びその道德的諸価値を徹底的に滅ぼすためにはまずこれら一切を否定して完全に無の状態にしなければならないと考えるからである。ニヒリズムを克服するためにはまず徹底的ニヒリズムを体験しぬくことでなければならない。

「これまでの価値を価値転倒することなしに、ニヒリ

ズムからのがれ去ろうとする試みこそ、その反対のことをうみだし、問題を尖鋭化する。」(「権力への意志」S. 23)

大切なのはニヒリズムを避けることではなくて、ニヒリズムを徹底的におしすすめることである。このことから初めて新しい未来への展望が開けてくる。

「私は、迷誤と迷妄の数千年のちに、一つの然りと一つの否とにいたる道を再発見したという幸福をもつ。私は、弱化せしめるもの、——憔悴せしめるもののすべてへの否を教える。

私は、強化するもの、力を貯えるもの、力の感情を是認するもののすべてへの然りを教える。」(「権力への意志」S. 41)

この言は主として「生」に関していわれるものであって、弱化せしめるとは「生」を弱化せしめるという意味である。この生の弱化のことをニーチェはまた「デカダンス」という言葉で表現する。デカダンス即ち生の墮落、頹落がこれまで至高の目標や価値設定に協力してきた。

「私のえた結果はこうえなく意外のものであつた。……私はすべての価値判断が、……憔悴した者の判断に帰しうることを、みいだしたからである。」(「権力への意志」S. 42)

従来 of キリスト教の道徳的価値は生理学的デカダンスに基くものであった。

「徳が、無我が、同情が、生の否定すらもが、教えられてきたのである。これらすべては憔悴した者の価値にはかならない。」(「権力への意志」S. 42)

デカダンスの結果である諸価値を人はこれらがデカダンスに基くものであると考へないで諸価値が独立して存在するものと思つてきた。

「憔悴の生理学を長いこと思索しつづけて、私は、憔悴したものの判断が価値の世界のうちへどこまで侵入しているかと問わざるをえなかった。」(「権力への意志」S. 42)

このデカダンスに基く価値がそうであるものとして認識されてこなかったことが、つまり生理学的取りちがえが禍悪の原因であるとニーチェはいう。

「徳は私たちの大きな誤解である。」(「権力への意志」S. 43)

問題としてのこされるのはいかにして憔悴した者が価値の法則をつくるにいたつたのか?ということになる。この問はニーチェによって次のように答えられる。憔悴した者がこのうえなく能力的な精力的な身振りであらわれたとき、このものは富めるものと取りちがえられた。彼は恐怖をまきおこした。狂信家、憑かれた人、宗教的癲癇病者、すべての常規を逸した者たちが、権力の最高類型として感取される。

「恐怖をまきおこすこの種の強さが、何よりも神的とみなされた。ここから権威はその出発点をえ、ここで知恵が解釈され、聞かれ、探しもとめられた。」(「権力への意志」S. 37)

病弱、狂気、錯乱がより強く、より超人的に、より怖るべきものに、より賢明になることと誤解された。

「ここでひとを誤ませたのは陶酔の経験であつた。この陶酔は権力の感情を最高度に増大するので、したがって幼稚にも権力そのものが増大すると判断された。陶酔の極に達した者が、忘我の境に達したものが、権力の最高位をしめざるをえなかった。(——陶酔の出発点は二つある。すなわち、生の満ちあふれる充実と、大脳の病的な營養状態と。)」(「権力への意志」S. 38)

ニーチェはこれまでの哲学、道徳、宗教のこれらすべての至高の価値は、虚弱者、精神病者、神経衰弱者の価値と比較されえないものかと問う。そしてニーチェは断言する。

「ニヒリズムの運動は生理学的デカダンスの表現であるにすぎない。」(「権力への意志」S. 30)

3. 極限的ニヒリズムとしての永遠回帰

「意味や目標はないが、しかし無のうちへの終局をもたず不可避的に回帰しつつあるところの、あるがまゝの生存、すなわち『永遠回帰』これがニヒリズムの極限的形式である。すなわち無(「無意味なもの」)が永遠に!」(「権力への意志」S. 44)

ニーチェは生成の過程には初めも終りもないと考える。このことはキリスト教の教えと正面きって対立する。またニーチェは生成の過程には神の意志が実現されるとするキリスト教的目的論的解釈をも否定する。要するに生成の過程には意味も目的もないのであるとニーチェはいう。ではなぜニーチェは生成に目標がないというのであるか。

「私たちは結末をつける目標を否認する。生存がそうしたものをもっているとすれば、それは達成されているはずであるからである。」(「権力への意志」S. 44)

即ちニーチェは生成の過程は無限に進行すると考える。出発点も終りもないのである。だからもし目標があるとすれば無限の生成の過程ですでに達成されているはずであると考え。さらにこの無限の過程において無意味なものが無限回、永遠にくり返えされると考える。これはまさにニヒリズムの極限的形式なのである。

「すべてのものは生成し、永遠に回帰する、——このことからのがれでることは不可能である!」(「権力への意志」S. 690)

ここでキリスト教の教えと対立するニーチェの言葉をみてみよう。

「世界は生成し、世界は経過しはするが、しかし世界は、けっして生成しはじめたこともなければ、けっして経過し終わったこともない。」(「権力への意志」S. 694)

「創造された世界」という仮設など私たちには一瞬たりとも氣にかけざる要はない。……初めをもった世界を構想する最後の試みが、論理的手続きの助けをかりて最近あれこれとなされてきたが——たいていは推測されうるとおり、或る神学的底意からである。」(「権力への意志」S. 694f)

ニーチェは生成の過程は無限であるとするが、世界は有限な一定量の力であるとする。従って無限の過程の中で有限な世界つまり一定数の力としての世界は無限に達成されているはずだと考えるのである。

「世界を一定量の力として、また一定数の力の中心として考えることが許されるとすれば——このことから結論されるのは、世界は、その生存の大々的なさいころ遊びをつづけながらも、算定しうる一定数の結合関係を通してなければならないということである。無限の時間のうちではあらゆる可能な結合関係がいつかはいちど達成されていたはずである。それのみではない。それらは無限回達成されていたはずである。しかも、あらゆる結合関係とその直後の回帰との間には総じてなお可能なその他すべての結合関係が経過したにちがいない、これらの結合関係のいずれもが同一系列のうちで生ずる諸結合関係の全継起を条件づけているのであるから、このことで、絶対に同一な諸系列の円環運動が証明されているはずである。すなわち、それは、すでに無限にしばしば反復された、また、無限にその戯れをたわむれる円環運動としての世界にはかならない。」(「権力への意志」S. 696)

このようにニーチェは生成の過程を円環運動と考える。このことは生成の過程を一つの目標に向っての発展運動と考えるキリスト教の教え及びヘーゲル哲学と真向うから対立する。

しかしここで注目しなければならないことはニーチェが生成の過程は無限であると考えたことは認めるとして世界を一定量の力の諸結合状態であると考えたことである。この仮定、つまり世界を一定数の力の中心と考える前提が、もしまちがっているとするなら、ニーチェの円環運動の理論は成り立たなくなるはずである。つまりニーチェは「この世界は、権力への意志である——そしてそれ以外の何ものでもない！」(「権力への意志」S. 697)ともいっているのである。だから世界はより大きな力へ向っての絶え間のない力の自己増殖的増大運動であるとも解釈されうるのである。即ち生成の過程は無限であり、かつまた、世界そのものも無限の力の増大運動であると考え、このニーチェの円環運動としての永遠回帰の教説は成り立たなくなってしまうのである。この点は今

後のニーチェ解釈にとっての一つの大きな問題となるであろう。ニーチェは「時間」は無限であるが、「力」は有限であると考え、しかしこの「力」も無限に増大するものであると考え、ニーチェの永遠回帰の教説はどのようなのであろうか、と問う必要があるのである。即ち力も無限に増大するとすれば、力の結合関係も無限にあるはずである。絶えず新しい力の組み合わせが存在するはずである。従ってこの場合には生成の過程に「発展」というものがあるというふうにも考えられるのである。

しかしニーチェは「時間」は無限であるが「力」は有限であると考え、従って次のようにいうことができる。

「世界が一つの目標をもっているとするれば、その目標は達成されているにちがいない。故意に立てられたのではない究極状態が世界にとってあるとしても、これまた同じく達成されているにちがいない。総じて世界が、停滞し凝固しうるものであり、「存在」しうるとすれば、ただの的一瞬间たりともその全生成のうちで「存在」というこの資格をもつとすれば、これはこれでまた、とっくの昔に、すべての生成を、したがってすべての思考をも、すべての「精神」をも終わらせてしまっているはずである。」(「権力への意志」S. 692)

無限の生成のうちでは究極状態が達成されているはずであるが、事実は達成されていない。このことからニーチェは生成に無目標性を与える。つまりニヒリズムである。善も悪も、我々にとって望ましいものも、想いかえすのも耐えがたいものも、すべてが永遠に回帰する。これはまことに厳しい教説である。ニーチェはデーモンに語らせる。

「お前が現に生き、また生きてきたこの人生を、いま一度、いなさらに無数度にわたって、お前は生きねばならぬであろう。そこに新たな何ものもなく、あらゆる苦痛とあらゆる快楽、あらゆる思想と嘆息、お前の人生の言いつくせぬ巨細のことども一切が、お前の身に回帰しなければならぬ。しかも何から何までことごとく同じ順序と脈絡にしたがって、——さればこの蜘蛛も、樹間のこの月光も、この自己自身も、同じように回帰せねばならぬ。存在の永遠の砂時計は、くりかえしくりかえし巻き戻される——それとともに塵の塵であるお前も同じく！」(「悦ばしき知識」三四一番)

このような存在論的に全くニヒリスティックな等しきものの永遠回帰という教説をつきつけられた我々はこの教説に対していかなる態度をとるべきかが問題となつてこよう。キリスト教及びキリスト教道徳の衰退から始まったニヒリズムは、生の次元にまで根をおろした生理学的デカダンスとしてのニヒリズムを経て、最後にニーチェ独自の永遠回帰というまことに徹底したニヒリズムま

で突きすすむのである。

4. ニヒリズムの克服

従来のニーチェ解釈では、ニーチェをニヒリストとして説明し、「永遠回帰」の教説をもってそのもっともニヒリスティックな極限的形式を提示するということではめくくるという風潮がかなり一般的であった。即ちニーチェを「無」の説教者として、(ニーチェ自身もニヒリズムを仏教のヨーロッパ的形式といっているように)、我々を無限の深淵の中に突きおとすものとして、不気味なニヒリストとして描写するのである。そしてニーチェをこの深いニヒリズムから脱出せしめるものとして、またニヒリズムを克服するべく志向したものとして論ぜずに、ヨーロッパにおける完全なニヒリストとして規定しがちであった。しかしニーチェは単に隋眠をむさぼっている当時のヨーロッパ人にニヒリズムを突きつけ人々の眠りをさましただけなのではなく、その本当の意図はニヒリズムを克服することにあったのだということが見落されてはならない。このことはニーチェ自身次のように語っていることから容易に推測されるであろう。

「ここで物語っているのは、……ヨーロッパの最初の完全なニヒリストとしてではあるが、しかしこのニヒリストは、ニヒリズム自身をすでにおのれの内部において終末まで生きぬいてしまっており、——それをおのれの背後に、おのれの足下に、おのれの外部にもっているのである。」(「権力への意志」S. 4)

ニーチェはこの言説で分るように、自分自身ではすでにニヒリズムを極限まで体験し、それを克服しおえたのである。ニーチェが未来においてはニヒリズムも解消すると考えていたことは次の言説で立証される。

『「権力への意志」すべての価値の価値転換の試み』——この定式で表現されているのは「原理と課題」に関しての一つの反対運動である。これはいつかの未来にはかの完全なニヒリズムを解消するであろう……」(「権力への意志」S. 4)

ではニーチェは一体なぜあれほどまでにニヒリズムを徹底的に主張したのであろうか。それはまさにニーチェによって考えられていたようなキリスト教道徳の諸価値を没落、衰退せしめるためである。つまり従来の価値を否定するのは、究極的には新しい価値を現出せしめようとするからにはほかならない。

「いったいなぜニヒリズムの到来はいまこそ必然的であるのか？それは、私たちのこれまでの諸価値自身がニヒリズムのうちでその最後の帰結に達するからであり、ニヒリズムこそ私たちの大いなる諸価値や諸理想の徹底的に考えぬかれた論理であるからである、——これらの『諸価値』の価値が本来何であったかを看破するために

は、私たちはニヒリズムをまず体験しなければならないからである……私たちは、いつの日にか、新しい諸価値を必要とする。」(「権力への意志」S. 4)

ニヒリズムといってもそれは直接この世界そのものがくだらないものであるということにはならない。従来の理想や価値がばかげたものであったにすぎないのである。

「……私たちは、新しい価値を探しもとめるよう私たちを駆りたてるパトスをみいだす。要約すれば、世界は、私たちが信じていたよりもはるかに価値あるものであるかもしれない、——私たちは、私たちの理想の幼稚さを看破せざるをえず、だから、おそらくは、世界に最高の解釈をあたえた意識しながら、私たちの人間的生存に正当な価値をすらあたえてこなかったかもしれないのである。」(「権力への意志」S. 26)

二千年にわたってヨーロッパ人は、実にプラトン哲学からキリスト教世界観に至るまで、此岸の世界に価値を置かなかった。「イデア界」とか「天国」とかを夢想して、この現実の、たれでもが感じ体験できる世界をおとしめてきた。従ってかの彼岸性が否定されれば、人々はこの現実の世界を見る見方も変わってくるであろう。そしてこの此岸の現実世界の中で新しい価値を求めるようになるであろう。

「現代のベシズムは現代の世界のくだらなさの一つの表現であって、——世界そのものと生存そのものとのそれではない。」(「権力への意志」S. 27)

即ちニーチェが生きていた当時のキリスト教世界がくだらないというのであって、決して世界そのものがくだらないというのではないのである。

世界に相対する人間主体の生の状態に基いて世界観が決められるのである。

「おのれが示し感ずる充実からおのずとあふれてて事物へと分与せざるをえず、事物を、いっそう豊満な、いっそう力強い、未来にいっそう富んだものとながめやる者、——いつでも贈与することのできる者、——この者とは反対に、憔悴した者は、おのれのながめやるすべてのものを、卑小化し台無しにする、——この者は、価値を貧しくする、すなわち有害なのである。」(「権力への意志」S. 37)

生に貧しき者、弱者は、なお世界を貧しくし、生に富める者、強者は世界を豊かにするのである。このことからニーチェは、ニヒリズムの世界を克服するためには強大な生をもたねばならないと考える。

「環境と外的原因との影響の説に反対すること。内的力こそ無限に優越している。外部からの影響のごとくみえる多くのものも、内部からの力の順応にすぎない。厳密に同一の環境も正反対に解釈され利用される。」(「権力への意志」S. 57)

同一の事実に対しても解釈する「生」が異なれば、違って解釈するのである。従って世界を豊かに富んだものとして見なすためには、解釈する「生」そのものが豊かで富んでいなければならない。つまりニヒリズムを克服するためには強い「生」が必要なのである。

「私たちすべては今日では生の**弁護者**である。——私たち無道徳家は今日では最強の**権力**である。……私たちは私たちの像にかたどって世界を構成する。」（「権力への意志」S. 84）

ではニヒリズムを克服するに足る「生」はいかにして生ずるのであろうか。

「**放縦**を、『自由放任』の原理を、**権力への意志**と取りちがえないこと（——権力への意志はその反対原理である。）」（「権力への意志」S. 89）

ニーチェは「自由放任」ではなく訓育を語る。

「私たちは意志の訓練を同時代人に先立ってうけている。すべての力は意志力の発達についやされる。」（「権力への意志」S. 95）

ニーチェはニヒリズムの状況の中にこれを克服するに足るだけの力をもった強い「生」が生長してくる徴候を感じとる。

「根本命願。現代人を印づけるすべてのもののうちには、いくらかの頹落がある。しかし病氣と密接して、魂のこころみられたことのない力や力強さの諸徴候がある。人間の卑小化をうみだすのと同一の諸根拠がより強くより稀な者たちを偉大さにいたるまで駆りたてている。」（「権力への意志」S. 81）

ニーチェは人類のみより豊かな力強い運動はどれも同時にニヒリズムの運動をもいっしょに作り出してきたと考える。

「**ベシズム**の極限的形式が、本来的ニヒリズムがあらわれ得るということこそ、事情によっては、一つの決定的な、このうえなく本質的な生長を示す、新しい生存条件のうちへの移行を示す徴候であるかもしれない。」（「権力への意志」S. 82）

ニーチェはニヒリズムを徹底的におしすすめるさ中でやがてはこのニヒリズムを一大転回し、新しい価値を生み出すに足る新しく強大な「生」が成長してくると考える。即ちこのような「生」の基盤の上に立つ新しい人間典型の誕生こそが望まれる。これこそが「超人」なのである。「超人」とは絶えざる自己克服の過程において自己を無限に超出しゆく存在のことをいう。そして従来の

偉大な人間が偶然によって生じてきたものとするれば、「超人」はこれと反対に意識的に意欲されるものでなければならない。即ち「育成」ということが問題になるのである。超人を育成するということこそが人類の最も偉大な事業なのである。

さて最後に永遠回帰の教説をつきつけられた我々はこの教説に対して一体いかなる態度を持すべきであらうかということが問題になってくる。一切が、無意味なものが、望ましいものも望ましくないものもが永遠に無限回帰するというこの徹底的ニヒリズムを前にして一体我々はどのように振舞うべきであらうか？ 永遠回帰がニヒリズムの極限的形式であることはすでに知られている。我々の前に運命的に立ちはだかるこの教説に対して我々は圧倒されてあきらめてしまってはならない。それはまず実存的倫理的にこの教説に立ち向うことが要請されるであらう。即ち、一切が永遠に回帰するのであるから、我々は現在の一瞬一瞬が永遠に回帰しても後悔することのないように、瞬間瞬間を充実させて悔いのないように生きなければならない。我々の全行為が我々によって「我々はそれを欲したのである」といいうるように、そして無限回それが繰り返えされても尚かつ「我々はそれを欲したのである」といいうるように、我々は一瞬の中に永遠をとらえるように生きなければならないのである。これは極めて厳しい人生態度である。我々には一瞬の怠情も許されない。我々の意志は強固でなければならない。我々の「生」はこの教説に立ち向えるだけに十分強くなければならない。永遠回帰の教説をこのように把握し、これに対してこのように生き抜くものが、ニヒリズムの闇夜を真昼の正午へと一大転回できるものであり、かつまた未来の諸課題を現実_に解決できるものであり、あらゆる従来の価値の価値転倒を企て、新しい価値を生み出すもの、即ち「超人」なのである。状況の変化は決して手をこまねいていてくるのではない。状況を変革しようとする人間の出現とこの人間そのものの力とによって可能なのである。

〔注〕 本論中の引用文のテキストにはクレーナ版のニーチェ全集の「権力への意志」とシュレヒタ版のニーチェ全集の「悦ばしき知識」を使用した。なお引用文の訳文には理想者ニーチェ全集の第十一巻第十二巻「権力への意志」原佑訳、第八巻「悦ばしき知識」信太正三訳を使用した。